事は、あなたから暫く芯棒(ママ)せよと云はれてゐるので、抜ける事が出来ないのです。我慢して本を読もう、予定を進行させ様と苦しんでゐると、何時のまにか明るい賑やかな街に出て、よう〳〵の思ひであなたのゐる事務所の様な横丁を見つけて三階へ登つてゆくと、埃つぽいドアがバタン〳〵ゆれてゐる中に大勢の人がゐて、私が訪ねると昔都新聞にゐた八ひろさんが出て来て、もうここにはゐないと云ふのです。私は仕方なく、又暑い〳〵陽のギラ〳〵してゐる白つぽい舗道に出て大通りまで来ると、其の明るい埃つぽい町を失業者のデモ行進が旗を立てて進んで来ます。もう戦争は終つて深刻な不況が全国に押しよせてゐるのです。ふと見ると、利ちやんが片足義足で、ゆううつな顔で、其のデモを睨む様に見乍ら、反動的な言辞を口走り乍ら、ペッとつばを吐いてゐるのです。私は逃げる様にアパートに帰つた。するともう冬か春の始めのつめたい空気の中に沈丁花が咲いてゐて、私は狭い部屋の台所で肴をやき、こもつた煙を出さうと窓をあけました。みつちやんと小田部さんはまだふとんの中にゐて、ふとんに肴の匂が着くと怒つてゐる、そんな夢です。あなたを探して汽車におくれまいとあせつてゐるのや、いろいろありますが、何時も逢ふ事が出来ません。目がさめると実に淋しくなります。現実ではそんな事はないでせうね。

北極の町は一、二と二巻来てゐます。読んでしまひましたから送りませう。ソ聯の十年と共通したものも割合にあります。ポーランド官憲の反ソ感情の煽りを二人とも食つてゐるところだとか、シベリアに対する想像と其の想像の全く異つてゐた点、ゲーペーウ(「脱」)について、職業婦人について、各民族に対するソ聯の方針について等々、中々面白いです。北極の町に来てルス・グルーバはソ聯の女の人たちの社会意識に驚いてゐる。他の国の婦人で、米国のリンチやストライキの事をきいた者は、ほとんどなかつたと云つてゐる。そして彼女もリトルページの様に、何も彼も他の国にゐた時きいたり読んだりした事実と異つてゐる事、わるい期待を良く裏切られた事を指適(摘)し乍ら、〝併し私はソ聯国民の代弁者ではない〟と云ひ訳の様に云つてゐる。目的地は北極の町イガハカで、其の町での生活は光つてゐます。其の町の市長は女である事も私どもにはゆ快です。此の町の若い娘は明るい輝いた表情で、決断と真摯な好寄(奇)心にもえてゐる。子供も大人も明つぱなしの暖い友情を、他国人であらうと誰であらうと注ぐ。其のあふれる愛情にグルーバはとまどひ(ひ)する位です。友情、愛情、それは個人間丈でなしに、彼等と政府、国家を一ッに結び合はせ、信頼に充ちたものにしてゐる。一切の活動は其の上に立つてゐる様子がまざ〳〵と見える。精しい事はあなたがおよみになれば解るでせう。リトルページの見方とは深さとか広さとか、仕事の関係で大分異つた点もありますが、著者の主観はとに角、具体的な事実の面白さがあります。

今日は海外電報も来ず、あなたの手紙もない。病気を大切に養生して下さい。これから又すこし勉強します。
午後九時。
もうあと残り少くなりました。今夜も相語らずお喋りが激しいけれど、もうあまり気にならなくなりました。
四時すぎに海外電報届きました。

幸子から謙一あて（一九四五年二月二一日の記・消印）

二月廿一日
今日は曇り日、東京も寒いことでせう。貴方の風邪の方は如何？早くよくなる様に、毎晩灯を消してねむりに就く前、念じてゐます。昨夜も又、あなたの夢を見ました。あまりいい夢（私にとつては）ではありません。昨夜とう〳〵オンリイ・イエスタデイを終りました。終りの方のウォール街の話は私にはあんまりわかりません。ほとんどわかりません。ですが一九二九年の恐慌のよつて来たるところはおぼろげに解る様でした。そして此のごろ、「アメリカ」に対する考へ方も、前とはよ程異つて来た事を知りました。今日は世界経済叢書（七）アメリカ資本主義の諸問題を出して来ました。わからぬかも知れませんね。でも一応読んで見度いのです。この調子だと何時、今年度のプランに移行出来るでせう。並行してやる方がいいと思ひ乍ら、どうしても今は米国史関係からぬけ出して、他に主力を注ぐきになれません。私のオナカは気のせいか、嫌に大きくなつた様な感じがします。双児かしら。私は男でも女でも、どつちでもいいけれど、どつちかと云へば、男の子がほしいと思ひます。顔や気質は貴方に似てゐて、色と声は私の方がいいとか、勝手な事を想像してゐます。悧口な思ひやりのあるかわいい子供であつてほしいものです。みつちやんに云はせると、年とつて身体の弱いあんたの様な人の子は、きつと何処かに欠陥がある、狼咽とか云々、と嫌がらせを云ふので、かわいい子でなくても不具でないといいと思ひます。全くあの人も勝手の良い人で、云ひ度い放題云つてゐます。〝私の妊娠は合法的だが、あんたのは疎解してゐて出来たのだから非合法〟だとか、30以上の妊婦はみにくいものだとか、妊婦は汚いからお風呂は後にしろとか、全くあきれてしまひます。よくもまあこんな事が平気で云へるものだと、終にはおかしくなります。それでも本人は云ひ度い事もこらへてゐるとの事です。
今日これから、ドライザーのヂェニイをよもうと思ひます。時代は一八八〇年ころからですね。あめりかの小説を、も

つと注意して買っておけばよかったですね。では又、後程書きませう。

一時

今、警報が出ました。又、東京でせうか。十九日のはこちらでも五〇台は見えましたよ。

「ジェニイ」読み終りました。これはジャングル程、当時の社会的脊景(背景)は出て来ませんね。一八九〇年代のトラストの起り始めは一寸出て来ますが。

あなたは毎日床に就いてゐるのでなくて、起きてゐるのではありませんか。そんな風だとこじらして、前の様になるかも知れませんよ。でも死ぬ脅(マヽ)れがないのなら、今、ろく膜位して置いた方がいい様にも思ふのです。其の方がずつと安全だから。

今、弘前の陸軍病院長から森ちやんが重態だと通知して来ました。明朝位にお父さん達着くでせうから、明日中には面会出来ると思ひますが、―お母さんはもうあきらめてゐると云ひ、どうも心配な事です。わるい時はわるい事が続くものです。あなたも変な事にならぬ様、充分注意して下さい。

私も、これからもつともつと悲しい事や辛い事が来ても、覚悟をして置かなくてはなりませんわね。何と云ふ嫌な時代でせう。まるで私達が結婚して此の方、ろくな事はありませんわね。丁度戦争の起つた年からですもの。

短い手紙ですが、今日はこれで失礼致しませう。又、今夜でも書きませうね。呉々も注意して下さい。早く逢ふ日が来る事をまつてゐます。

幸子

幸子から謙一あて（一九四五年二月二二日の記）

二月廿二日、大雪

東京の方も今日は雪ふりでせう。起きた時は一尺位積つてゐましたが、まだ止み相もありません。九時から隣組の雪かきが始まりました。桃ちやん、二、三日風邪で休んでゐましたが、今朝は三九度も発熱しました。昨夜、彼女がだる相にしてゐるのに、ふうちやんもみつちやんも大喋りをしてゐて、ふとんが敷けないで、とう〳〵(たうとう)桃ちやんはうたゝねの形でこたつで横になつてゐました。十時ころ、もうねた方が善いと云つて、桃ちやん丈はねかせましたが、二人はとうとう其のわきで一時まで喋つてゐるので、私もねむれず、たまり兼ねてもうねる様に云つて、よう〳〵(やう)みつちやんが下

へゆきました。案の条、今朝はこんなにひどくなつてゐるんですもの、本当にいやになります。又今日、桃ちやんがねてゐる部屋でガタ〳〵ワア〳〵やられては、一寸もねむれぬだらうから、強硬にふうちやんにもみつちやんにも、二階に今日は来ぬ様にして貰ひました。みつちやんは独栽とか云つて怒つてゐますが、あの人の馬鹿はわかり切つてゐるけど、ふうちやんまで年がひもない、毎晩〳〵二時や一時までワア〳〵下らぬお喋りで人の妨害を平気なのには、いささかあきれました。なにしろ朝の九時ころから夜中の一時、二時まで人のわる口、映画の思い出、流行唄の展らん会がもう一週間も続いては、全く腹が立ちます。いくら〝いいわ、もうなれたから〟と、私が社交的な口をきいたつて、すこしは考へ相なものを、ね。どうしたんでせう。今朝、すこし強く云ひました。すこしふくれてゐたけど、し様がない。ルンドバークは中々面白いですね。私は表紙を見てゐた時は、単なる伝記式のものを想像してゐました。まるで異つて、一、一、具体的な数字をあげて、大財閥と大統領の結びつき、策動、陰謀が出て来て、今更モルガン、ロックフェラー等の社会悪に、其の力に驚いてゐます。恐ろしいシステムですね。大統領個人の力なんて、何もならない事がよくわかります。弗外交の意味も、民主党も共和党も資本の道具であることも、上院も大審院も金融家の番頭に占められてゐる事も、本当に良く理解出来ます。アメリカは恐ろしい国だと思つたのですが、一人アメリカのみではありませんね。陰謀、策動、一切の罪悪は政府、国家の名の下に公然と行はれる恐ろしさ。ルンドバークの其の本は、よくアメリカで出版出来ましたね。出版されたあとでいろいろうるさい迫害、圧迫はなかつたのでせうか。

今お昼食を食べて来たところ、お粥とぢやがいもと昆布の煮付。桃ちやんは汗をびつしよりかきましたので、着更へをさせたところです。アスピリンをのむと一応熱が下るので、誰ももうよくなつたと思ひ勝ちですが、熱を下げて呼吸の苦しさを除き、食慾をまさせるためで、なをつたと思つてガサ〳〵動いてはいけないのです。あなたもさうだつたのでせう。たいていアスピリンでなをつたと思つて動いて、肺炎を起すらしいです。

こんな雪の日は郵便も、集めにも配達にも来ないでせうね。お父さんたちはもう弘前に着いたでせうが、うまく面会出来たかしら。あちらもひどい〳〵六〇年ぶりの雪だとか、足ごしらへはわるいし、どうしてゐる事かと心配になります。足を濡らして、二人とも肺炎にならねばいいけれど。何をするにも妨害だらけの時世で、一ッ困難があると、次々に重なつて来ますから、うつとをしい事です。勝つもまけるも早いとこ決定してくれゝばいいとばかり思つてゐますわ。

雪はまだ〳〵降り止む気配もなく落ちて来ます。もう一尺五寸位はつもつたことでせう。雪掻きの後は、もう埋つてしまひました。流石に自動車も馬力も自転車も通りません。雪のための交通と絶のところもあるでせうね。北日本の方は

もつと〳〵ひどい事でせうね。信越はほとんど動いてゐない相ですし、山形、秋田を通るのも止まつたまゝらしいです。こんな日、私の様に自分では食事の支度もせず、炬燵で本をよめる者は一番得ですね。あなたはどうしてゐるかしら。今ごろ起きて、お粥でも煮てゐるかしら。本当におきの毒です。十九日さへ出発出来てゐたら、何かとすこしは役に立てたでせうにね。

では又、あとで書き足しませう。

幸子から謙一あて（一九四五年二月二二～二三日の記）

二月廿二日夜九時

今日の雪とう〳〵（たうとう）夕方にやみました。なんとつもつたこと、こんなのは二・二六以来の様に思はれます。ひるま道路わきの河の中に雪をどん〳〵投げこんだのが氷つたのか、かたまつたのか、栓の役目をしたので、とう〳〵水が溢れて玄関の辺まで水浸しになりました。方々の家から人が出て大さわぎして、シャベルやなんかで何とかした様です。夕方（食後）私がポストへ手紙を出しに行つた時は、何ともなかつたのですけれど。夜に這入つて温度が下つたためでせう。今夜の夕飯は大根とポテトのカレー煮で、あまりおいしくありませんでした。下ではお母さんとみつちやんと、硫黄島の事で憤激してゐます。ふうちやんは隣組の雪掻きに出て疲れたとて、午後は殆んど二階の炬燵でねむつてゐました。桃子は夕方から又9度五分になり、水で冷やしてゐますが、明日は吉川と云ふ医者を往診に来て貰ふ事にしました。今ごろの肺炎はキンが濃いとかで、こわ（は）い相です。

あなたは其の後どうでせう。十七日の手紙以来、あなたからのお手紙来ず（尤も十八日の夜、声をききましたが）、何となく心配してゐます。今日は大雪のため手紙類は配達されない事と思つてゐましたが、午後に西山さんの手紙と海外電報とが届きました。あなたの方、私がそちらにゆくだらうと思つて、其のころ手紙を書かなかつたのだらうと思つてゐます。私も上京をきめて以来、手紙を書かなくつて、いよ〳〵駄目ときまつてから、又書き出したのですから、あなたの方へ届くのも不定だつた事でせうと思ふわ。こんな大雪では、又あちこち汽車の都合も悪くなつたでせうね。硫黄島の事を思ふと、もう私の上京なんて夢に終る様に思はれます。今までよりも更に空襲も激しいしひんぱんでせう。東京行の乗車券の入手はむづかしいでせう。

西山さんの手紙にも背の君は疎解(開)して帰っておゐでになつたでせうと書いてありました。こんなあぶない時に残ってゐるのが不思議に思はれるでせうね。調査会からの月給も必要でせうが、いのちあつての事だとも思はれます。今までの空襲では世田ケ谷も安全地帯であったかも知れませんが、もうそれも長い事もない様に思はれて心配でなりません。それは毎夜ねむる前、あなたの健康、安全を祈つてはゐますけれど、そんなものはほんの一時の心慰めで確実性がありませんもの。兵隊にとられたのならし様がないけれど、―なんて矢張り心配のあまり考へてしまひます。こんな手紙を書き乍らも、此のごろと来たら、明日の計画すらそごを来たすのだから、ましてや三日も四日も、時には五日もかかる手紙なんて、届くものやらどうやらと思はれても来ます。

ルンドバークもそろ〳〵上は終る位よみました。あまり精しい事は記憶に残さぬ様な読み方で読んで来ました。もうそろ〳〵嫌になり始めてゐます。あんまり精しい事は私には復(複)雑すぎて、よくわからないのです。今はウイルソンと其の背後の財閥です。あとはとばしてローズヴエルトとニューデイルのところへゆかうか、それともたんねんに読まうか迷つてゐます。途中で、笑はぬでもなし、をもう一度読みました。

今あなたはどうしてゐるでせう。原稿を書く程の元気があればいいが、又9度も熱が出てゐたら、着更へのねまきもないでせうし、困つてゐると想像したりしてゐます。

今夜はもう私はねむらうかとも考へます。なにしろ毎夜お喋りのうるささで、ずつと睡眠は不足してゐます。今日もひるまは目が□□〳〵する程ねむい時もありました。あまり悪くない夢で、あなたに逢ひ度いものです。

では今夜はこれでさよ(や)うなら。元きでゐる様に祈ります。

二月廿三日

今朝は又雪が降ってゐましたが、もうそろ〳〵小やみになりました。昨夜はおぼろの月に照らされて雪女郎でも歩いて来相な眺めで、寒いのも忘れ外を眺めました。

飯田線は雪の為、故障を起してゐる相です。今朝は家中で一とう早く起きました。起きてもする事がなくて、所在ないので困りました。今日は経済叢書の方にかかります。ルンドバークはあれ位にしておきます。又、何か精しく知り度い時に読む事にしませう。段々晴れて明るくなつて来ました。今日、うんと陽が照れば、昨日の雪はぼつさりの春の雪だから、直とけてしまふでせう。今朝の私の置炬燵の心持良い暖かさ、部屋の明るさ、貴方が向ひに座ってゐたら上々だ

と思ひます。
此のごろ一寸もまとまつた手紙が書けず、チョコ〳〵の走り書きの手紙ばかり書いてゐますね。あんまりしばしば書き過ぎるせいで、まとめて書く様が事がなくなつたのでせう。今日は貴方から手紙が届くかも知れませんから、其の時、又何か書く事にして、今朝はこんな手紙で投函しませう。
弘前も雪はもつとひどい事でせう。心配です。ふうちやんは今朝、森男の夢を見て、夢見が悪いと云つて心配してゐます。桃ちやんの方は今朝は熱も下りました。頼んだ医者は二人とも大雪に閉口したのか、口実つけて来てくれ相もありませんが、熱が無くなつたから、どうでもいいと云ひ合つてゐます。
では又、午後に書きませう。

幸子

幸子から謙一あて（一九四五年二月二三～二四日の記）※

二月廿三日午後
コーヒーをのんで熱い炬燵にはいつてゐたら、又はな血が出て来た。のぼせたのでせうね。ルンドバークはやめ様と思ひ乍ら、第二巻へはいつたらジャーナリズムの世界の事、とても参考になるので、遂百ページ近くも読んで来ました。ぼんやり考へてゐた事実がはつきりして来て、非常に啓発されます。もうすこし読みつづけませう。
お母さんは又胃病でねこみました。十月目十日目の割合で、トツトか胃病かかが起ります。随分弱つて来たのでせうね。もう四時になるのに、まだ今日は何処からも手紙が来ません。雪で方々交通故障が起つたのでせうか。
もう廿分位立つたら、夕方掃除に下りてゆきます。陽は朝の中照つてゐたのに、午後はくもつてしまひました。此の分ではあの雪も中々溶けさうもありません。
あなたの仕事の方、順調に進んでゐますか。熱があつたりしては、中々思ふ様に進まないでせう。
野菜の配給は相変らず悪いですか。こちらもここずつと、あまりないところへ、休診を続けてゐるので、患者さんから時々はいるのもストップで、大根ばかりになりました。大根も続くと嫌になります。殊に煮た時の一寸おならくさい様なにほひはムカ〳〵する様に嫌です。お父さん達弘前では林ごをうんと食べられるかしら。お土産にする程買へるといいけれど。今一番ほしいものは林ごです。毎日三度とも林ごでいい程、林ごに飢えてゐます。此の前の時も、よく林ご

を食べましたね。あの頃は一山拾銭で四ツ位もあつたけれど、当時は拾銭の林ごも、それ程思ひのまゝには買へなかつたし、林ごを買ふ位のお金の出来た時は林ごが無い。全くままならぬ世の中ですね。

午後七時、外は又、ブリューゲルの冬景色そつくりの冷めたい淋しい雪の夕暮です。現実を離れた世界へ想像がとんでゆきます。冬の中でもいろいろ美しい風景はありますが、今日の夕方の様な、一種のフンイキをかもし出す夕景は少いでせう。日本の田舎の村からお伽話の世界を思はせるものがある。

今日はとう〳〵海外電報も、あなたの手紙も来ませんでした。あなたの方では近々私がゆくものと思つておゐでのせいでせうか。切符はまづお父さんでも帰つて来て話してくれない事には無理ですし、今はお母さん、桃子と病気、早苗も手がはなせない状態ですから、私が上京する事は無理だと思ひます。みつちやんは来たすぐの二日は、あてつけ見たいに朝夕お勝手の手伝ひをしましたが、三日目からは掃除も食事も、ふとんしきすらやめて喋つてばかりですから、あの人を当にする事は出来ません。看護婦さんもお父さんの留守中、代り〳〵休暇を与へたので、これ又すつかり当には出来兼ねます。防空当番を誰かに代つて貰つて、お父さんといらつしやい。あなたから手紙が来ないので、廿日の朝、お父さんたちがあなたのところによつたのかどうかもわからないし。

今日はき持もわるくなつたし、痔もわるくなつたし、ころりとねころんで雑誌でもよもうかと—これから—思ひます。なにしろ此のごろはすこしゆううつすぎる。現実も夢も。のんびりたつぷり本をよむ余裕を持ち乍ら、こんな事を云ふものぢやありませんね。風が出て来て窓をゆすります。氷つた路を荷馬車の音がする。明治時代の小説を思ひ出します。

これは明日、もうすこし追加を書いてから出しませう。これから横になつてルンドバークをよみます。　さようなら

ルンドバーク（下巻）の方は実に面白いですね。私はこんな啓モウ的な本だとは全く思ひもよらなかつた。ジャーナリズムもだけれど、社会事業に就いて解剖、批判は凄いと思ひます。一体ルンドバークて、どんな人なのでせう。序文の説明では20行位の紹介があるけれど、それでは彼のエッレキだけしかわからない。あなたは勿論、もうおよみになつたのでせう。どう思つて？　ね様ね様と思ひ乍ら、あまりの面白さにとう〳〵引きづられて来ました。今度こそ本当にふとんを敷きませう。

廿四日朝
今朝はいいお天気ですが、お母さんは荒模様。
これから又勉強しませう。

※この手紙文は二月二四日付けの封筒中に挿入されていたが、その封筒には切手が貼付されておらず消印の跡もない。おそらくは投函・郵送されなかったのであろう。

謙一から幸子あて（一九四五年五月二一、二二、二四日の記）

飯田線は「さはんど」あたりまでは寒いくらいのがら空きで、さすが早立ちの余徳（得）かと思つてゐたら、そのころからぼつ〳〵こみ出したのが、やがて赤木、赤穂のあたりから竹藪のぎようぎよう（ぎょうぎょう）し（之はよしきりまたはよしはらすずめの別名ださうです）のやうな、うぐひす色の中学生がごちや〴〵にのりこんで来て、ギチョ〳〵〳〵ギャツギャツと声がやかましいだけでなく、足をふむ、弁当らしく温いカバンをおしつける、誰かに叱られる、それは〳〵騒々しい限りで、それまでうと〳〵と半睡で来たのが、すつかり眼をさまさせられて了ひました。だがこまつちい中学生と云ふものは、近くで見ると中々可愛いいものですね。その点でも、多少うすよごれてはゐるものの、ぎよう〳〵しそつくりです。この竹藪電車も伊那北がすぎると普通の電車にかへつて、僕はまたゐねむりにかへりました。辰野着が八時。みのわ屋へは入つてお弁当をたべようかと思つたが、ノレンの方がしまつてゐるので、ちよつとおくくう（ふ）になり、駅の待合がごみつぽくなければ、待合でたべようと思つて行つてみると、ここは切符行列で、食慾もなくなつて、汽車にのつてから食べることに方針を変更しました。
八時何分かの上諏訪行きが出て了ふと、あとは百キロ以上切符の「特別詮議」と書いた窓口の一列と、百キロ以下の一列とがあるきりで、待合のベンチはがら空きになりましたが、まだ何となくごみつぽいのでマスクのまま本を読んで、九時二十二分まですごすことにしました。数人がベンチのあちらこちらで朝食らしいにぎりめしをたべてゐましたが、僕は朝、出すべきものを出さずに来たのでおなかが張り気味で、それほど食べたくはなかつたのです。こんなぐあひで待つくらいなら（ふ）、一電車おくらせて、便所も食事もすませてくればよかつたと思ひました。

突然うしろで「ああ、おなかがすいちやつたなあ」と蚊のなくやうな子供つぽい声がかすかにする。ふと見ると一人の女、袖がとれて白いジュバンの出た綿入れ着物に赤いたすきをかけ、大分くたびれたモンペにはだし、頭はとりてきのちよんまげのやうにして、ころ〳〵肥つて小柄で、一見子供のやうだがよく見ると三十前後のおかみさんと云つた女が、ベンチに千切れた袖と棉切れとをしいて、寒雀のやうにちんまりまるくなつて坐つてゐたのが、よつこらしよと坐りなほしてゐます。罹災者か乞食か区別がつかない。「ああ、おなかがすいちやつた」、もう一度さう云つてキヨロ〳〵してゐたが、ついとベンチに立ち上り、それからベンチからおりて、隣で食べ終つたばかりの戦斗帽、バーバリ、ゲートル姿、ひげのそりあとも青い三十五、六の大男に、「ダンナ、昨夜から何もたべてゐません。おなかがすいてしかたがない。何かたべるもの下さい」と手をかさねて、チョウダイをしました。「わしやね、之から旅行するんで弁当は要るんだよ」とあつさりことはつて、弁当をかばんにしまつて立ち上る。彼女は「しようがない」と云ふ風に小さい眼をまぶしさうにしながら今度は別の方向で、身ぎれいにした五十五、六のおばあさんとその娘か嫁らしい若い女と二人づれが、ふうちやんのおべん当のやうなうるしぬりの大きなお重のやうなべんとう箱を二つか三つピクニクのやうにひらいて、ごまのふつた大きい白米のいかにもうまさうなおにぎりと、何かお煮つけとを食べてゐるところへチョコ〳〵歩いて行つて、やつぱり両手をかさねて出す。「之でも足りないんですよ。まだ之から夜まで旅行するんですからねえ」とそのおばあさん、すげなくことはつて、ちよつとたべにくさうにしながらたべかけをたべ終つて、お弁当をしまひかける。例の女がこんどはその隣の二人の上品な白髪婆さんの組に、之は何もたべてゐないが、そこへ両手を出す。おばあさんたち首をふつて、にや〳〵笑つてゐる。女はさうひどくしよげた風もなく、今度は僕の方へ来さうである。女が去ると、さきのおばあさんと嫁か娘の二人づれはさつきしまひかけたお弁当をまたひらいて、何か小声で話しながら食事を再開してゐる。僕は彼女たちにちよつと反感を覚えたので、おにぎり一つ出してやらうかなと、どうしようかなと思つてゐると、「おじさん。何か食べるもの下さい」と蚊のやうな声で云つて両手をさし出す。眼はちよつとまぶしさうだが、卑屈に馴れ切つた表情で、わりあひころ〳〵肥つてゐて、何だか白痴で駅にとまりこんでゐる女と云つた風なので、感じがよくない。専門の乞食らしい。かばんからわざ〳〵とり出してわけてやるほどのあはれさも感じなかつたので、だまつて首をよこにふりました。こちらが食べてゐる時なら一つぐらいやつてもいいと思つたが。その女もことはられ馴れて、あつさりあきらめる。そこへ一人、矢沢先生のやうな年かつこうの人が黒い背広にゲートルまいて、書類かばんとふろしきづつみ二つとを持つて、そそくさとベンチにこしかけた。女はまたその前に手を出す。「え、なんだあ、た

べるもの。そんなものもつてやせんよ」と、びつくりするほど大きな声で云つて、さつさとかばんのつめかへをやりはじめる。女は両手をふところへしまつて、またベンチの上へちよこんと坐りこむ。そのおじいさんはかばんのものを出したり入れたりしてゐたが、新聞紙のつつみからムシパンのやうなものの小さい一切れをつまみ出したかと思ふと、くるりとふりむいて、「おい」と例の女へつき出す。彼女はあたふたとベンチをおりて、それを両手に押しいただいてベンチへかへる。

そんなことを見てゐる間に改札がはじまつた。汽車は可成り混みましたが坐れました。汽車の中では、諏訪あたりでは、疎開の衆が食べ物がなくて、畑へ植えた種いもをほり返して仕方がないとか、田の草をみんなたべて了ふとか、そんな話ばかり。僕は眠くて、おにぎり二つをたべて了ふとすぐにうと〳〵しはじめる。おひるは笹子附近で一時過ぎでしたが、弁当箱のおにぎりと卵子とたべました。新宿では小田急がおくれて、帰宅は四時半になりました。それから白米おにぎりと、あさちやんのおかずとたくあんとを食べ、お茶わんでアルコホルをのんで、早寐しようと思つてゐるところです。

五月二十二日（曇）

今日はあなたのお手紙四通を一挙にうけとりました。おいしいやうな怒つたやうなすねたやうなさびしいやうな四通です。十五日から十八日迄。

僕はもう本拠をそちらへ移して了つて、こちらへ出張して来たやうな感じです。何だかすつかり片づいて了つたやうな。我々の住居は思つたより住みよくて、あなたがあちらこちらかゆがることをのぞいて、申し分ありません。あさちやんの云ふやうに、北へ一坪のお勝手が出来れば、全く理想（低い理想かもしれないが）的です。さうすれば六畳もまるまるつかへますからね。何とかうまくそのやうに出来るやうに骨折つて下さい。僕は今月末か来月初旬までにすつかりをうまくやりませう。僕は今月末までに片づけたいが、芦野氏は月の下旬は月報でまるで時間にも心にも余猶がなくなるので、あるひは来月上旬までのびるかもしれないのです。みそ醤油その他はこちらでとつておきませう。その方が簡単でせう。米は十日なので、十日までにはどんなことがあつてもそちらへ移つてゐるでせう。

おにぎりは今日のおひるまであるので、大助かりでした。今日は午後から、八王子へたくあんと大根とを持つて行つて、この手紙を出して来ませう。夕飯はよばれて来るかも知れません。

今朝、ぬれた亜炭を選り出しましたが、どうもそれを見るにつけてもいううつで、この燃料の調子から云ふと、ここ十日と持ちません。

では今日はこれだけ。まだ誰も出勤して来ません。

あさちやんがまだあなたの所で泊つてゐてくれるなら、どうかよろしく御伝へ下さい。おにぎりやお弁当のおかずも大変おいしく、本当におかげさまでしたと。

あなたも水汲みその他に無理しないやうに。おなかを大切に。明日はユベラかオリザニンを買ひに行きませう。

なほ、矢沢さんにもどうかよろしく御礼を御つたへ下さい。

五月二十四日（木）曇

出ようと思ふと人が来て、今日まで八王子へ行けなかつた。浅原ももう帰つてゐるだらうと思ふので、今日午後行きます。その時此の手紙を投函しませう。

今朝の空襲は、今までに一番スリリングな空襲でした。昨夜は昼抜きのせいかおなかがへつて、今朝の分まで食ひこむほどたつぷりたべた後、眠いので九時頃床には入つて本を読んでゐる中、すぐ眠つて了ひました。だから一時頃のサイレンで眼がさめた時は、もう朝方のやうな気持で、ラジオで「一時何分」ときいて驚いたくらいでした。どうやら大挙来るらしいので、西の窓をあけて月明りでジヤンパーと洋服とレインコートと、即ちありつたけの衣類をつけ（実際可成り寒かつたのです）、米を非常袋に入れ、原稿をカバンに、鍋とムシガマとを持ち出して、鉄カブトをかぶり、露台へ出ました。雨のあとであたりがひえびえして、月もうす雲がかかつてゐたが、概して晴れてゐるので、久しぶりのBとて、今夜はゆつくり観戦しようと思ひました。その中思つたより早く、西南方からBが二、三機づつは入つて来ました。照空灯に照らされ乍ら二千米ぐらいの低空で都心に向つたかと思ふと、もう渋谷の方は火になつてゐました。火はだん〳〵東南方一面にひろがつて、煙がもく〳〵入道雲のやうに湧き、赤々と照り映えました。今日は大ていが此の上空を西から東へ通過するので、これは少々危険だなと思つてゐると、真上をとび去つた大きなBが、追躡する味方機（翼灯がついてゐる）のツツーと発射された火砲に忽ち火を吐いて、そこら一面拍手と歓声とがわき起つた中を、暫く火だるまで飛んだ後に下北沢辺か渋谷と覚しきあたりへ、昼のやうに明るい光を発しながら美事な花火のやうに壮麗に落ちて行きました。続いてまた一機が、やはり友軍機の火砲に火を発して、之は可成り長く赤い光の玉になりながらと

びつづけましたが、新宿かもつとさきあたりで、地上の火と煙の湧き上る中へ落ちて行きました。さう云ふ風なBの撃墜を、この露台から割合ひ近く七つか八つも目撃して、戦争始つて以来の観物を体験したのですが、いづれもこの上空を低空でとぶので、そしてこの近辺でもしきりに焼夷弾を落すので、露台の上にゐるのは危険だなと感じました。時々照空灯につかまらないBが、此の上空をすぎる頃から地上の煙の中へは入つて赤く機体を光らせ乍らとび去るので、思はずひやりとします。すでに経堂の南東北と三方は火の海で、入道雲は赤々と天空一ぱいにもり上り、焼夷弾の花火のやうに落ちる光や、空中戦の火砲の赤い線、高射砲弾の炸裂、そして火だるまか慧星(彗星)のやうに燃えながら惰性でとぶBなど、全く凄絶(ママ)だが美事な光景でした。

二時もすぎた頃、また一機が此の上空をやや北寄りに、照空灯につかまつたまま低空で西からとんで来ましたが、満を持した此の近くの高射砲（少し西）が一挙にドドドッと発射すると、そのBの巨大な胴体からパッと火が発し、やがて凄い火の塊になつて此の辺一体(帯)の地面の石ころまで見えるほど明るくなりました。そのまま丁度此の上空へ来たので、これは危いぞ、弾倉を開いたにちがひないから、焼夷弾やバクダンが降つて来るぞ、と思はず露台から下へとびおりる手段を考へました。どうにかこの上空をそのまま過ぎたので、助かつたかと思つたとたんに、異様に弯曲する轟音を発して、その火だるまがこの少し東北の上空でぐつと旋回し、僕の真上へうづまきながら落ちはじめました。下では大勢が奇声を発して、「防空濠(壕)々々々」と呼(叫)びながらとびこむらしい。僕は自分の真上でなく、やや東北寄りに流れたから大丈夫とは思つたが、火になつた巨大な翼がぐらりぐらりまひ乍ら、そのまはり一面に大小の破片が物凄い火の子(粉)と一緒に轟音をあげて落ちて来るのを見てゐると、思はず胸がどき〳〵しました。これはここから三町ばかりはなれた風呂屋のこちらの横丁へ落ちたのです。何だか此の四、五軒隣へ落ちたやうな感じがしたほどです。機体が落ちて、夜目にも真黒の煙がもくもくと果てしなく上つてゐる間にも、火になつた大小の破片と火の粉がそこら一面にふり続けましたが、このあたりへは、火は落ちませんでした。さうかうしてゐる中にあとからあとから不気味なBの巨体が西空からあらはれて、この真上へ来るので、さすがの僕も一まづ非常袋やかばんを持つて下へ下りました。芝生は雨でぬれてゐました。小使さん達が、「菊池さん、よく上でゐられましたね」とさはいでゐました。

間もなく敵機の飛来が少くなつたので上へあがりましたが、二百機にはなつてゐないと思ふけれど、その大部分が此の上空を飛んだので、僕には今までで一番スリリングでした。この辺の人はみんな落ちたBを見に走つたやうです。僕もあとから行つてみませう。空襲がやんだ四時頃には、空はもう明るかつたが、今も太陽は煙雲でどんよりしてゐます。

では。（芦野さんとの交渉うまく行くでせう）。

謙一から幸子あて（一九四五年五月三一日の記、六月二日の消印）

五月三十一日

昨夜は浅原君宅へ泊りました。

昨日桜上水（京王線）から行つたのですが、桜上水の駅と車庫は、附近の人家と共に焼けて了つて、駅員が露天のベンチで証明書を点検して通すのです。僕は身分証明を見せて、重要文書を八王子の分室へ疎開するのだと云つて通過しましたが、多摩まで来ると電線故障で府中まで三キロばかり歩かされてうんざりしました。こんな交通状況では、今日は八王子まで行きつけるかしらと危ぶみつつ行つたのですが、どうやら四時間かかつて彼の家につきました。

丁度彼は出張から帰つたばかりの所で、さつそく二人ともくつろいで、夕食を彼の両親と妹さん（トシコさん）と一緒によばれ、それから彼と二人で、約十丁ばかり浅川の方へ行つたところの「サンド」とか云ふ土地にあるキミヨさんの実家へ行きました。キミヨさんは四月末から痛んでゐたおなかを、五月十二、三日頃にセメンをのんで更にひどく荒して了ひ、ずつと流動食で今に到つてゐるのです。一時は薬をのむための水さへ、口にふくむともう胃腸が痛んで堪えがたくなつたさうです。昨夜はもう床に腹ばひの形で、此の前十六日に行つた時よりはるかに元気さうになつてゐました。腸の敏感症だとか、虫がゐるんだとか（実際セメンで少し出たさうですが、此の頃は全然ないさうです）、胃ケイレンの一種だとか、胃カイヨウ（クワイヤウ）だとか、腹膜炎の怖れがあるとか、黄だんだとか、既に四人まで別のお医者に診てもらつて、そんなにいろ〳〵ちがつた見立てで、まだ何ともよくわからないのださうです。山羊の乳とブドウ糖注射とスープとで一ケ月つづけたのですから、ずい分苦しいわけでせう。併しちやんと化粧をして、さうやつれた感じがしないのは、若さのせいかもしれません。

福島と云ふのが彼女の実家の姓ですが、福島家は此の辺の旧家らしく、がつちりした昔風の門と塀の外を小さい川（どぶと云ふべき所ですが、それがきれいな水が流れてゐるのです）でとりまかれ、門の中はどこが母屋かと迷ふほど大きな、やはり昔風な棟がいくつか組みあはさつたやうに建つてゐて、商家のやうな（機屋ださうですから。今は農業だけですが）農家のやうな、また床屋のやうな家がまへです。玄関をは入つたとつつきが、そのまま十畳ばかりのお座敷の

やうで、部屋のまんなかに大きな立派なテーブルがおいてあり、その向ふ[ろ]が長火鉢がある台所か茶の間らしく、之も広くて十畳ぐらい[ろ]、座敷の左手に八畳ぐらいの居間があつて、之が本当の座敷かもしれませんが、そこに六、七年もさま〳〵な病気で寐つづけてゐると云ふキミヨさんの不幸な兄さんの床がしいてあつて、腹膜、腎[ま]于炎、ヂ[ま]ブス、肋膜、背骸カリエス等、一家中の病気を一人で背負つて来たやうな、その兄さんが、一朗君とキミヨさんが平常僕のことを何かと宣伝でもしてあつたらしく、すぐ出て来て朗らかさうな、元気のいい調子で、そのお父さんと二人で僕のお相手になつてくれました。伊藤新一君の所の四彦君のやうな一家の地位にあるが、四彦君より年も多く（二十七、八でせう）、明るい感じの人です。

風呂へは入つて、とまつて、今朝帰りました。今日之からまた少し本を持つて行きます。一緒に配給の酒を持つて行くつもりです。之も、そちらへおみやげにしようかとも思つたが、持つて行くのが大変だし、若し割つたり、時節柄悪くなつて了ふといけないので、浅原に進呈、と云つても結局今夜二人でのんで了ふことでせう。

浅原の所でも、青山の叔父さん（オデコの正基君の一家、正基君は兵隊でゐない）が二十五日の夜焼かれて、福島さんの借屋へは入つてゐます。荷物は前から運んであつたが、それでもずい分焼いたさうです。青山学院も焼け落ち、一丁目の陸軍大学までずつとやられて了つたさうで、死傷も相当あるさうです。今朝の新聞で岡見護郎と云ふ毎日新聞の何とか部長が、一家五人渋谷区内の自宅で空襲で死んだとありますが、あれは我々の元の家から少し三河屋の方へ行つた所、例の梶君の家の向ふあたりにあつた家ですね。僕はプシも今まで生きてゐたとしたら、廿五日夜のあの空襲で死んだことと思つて、「クウシュウの眼はまつか」と云ふ言葉をふいと思ひ出しました。犬猫の焼死も多いさうです。

今朝新宿へ出て、小田急で帰りましたが、冬に寒風の中を、荷物を負つて歩いたり群れたりしてゐた人々の姿にもまして、今、汗づくになつて、ふとんやリュックを背負つた罹災者の姿は悲しいものです。新宿は駅も京王電車側と青梅口（小田急）がすつかりやられ、ホームの屋根も半分ぐらいこはれてゐるし、荷物の起重機の陸橋も焼けてゐます。武蔵野カンと新宿ホテルとは残ガイとなり、三越、イセタン、第一劇場だけがどうにか残つて、あとはすつかり廃跡です。小田急沿線も新宿から代々木上原まで、ずつと焼野原を通り、また世田ケ谷中原から梅ヶ丘も焼野原ですから、やはり相当なものです。大久保辺では焼けあとに焼トタンのバラックがずい分出来て、人々が炊煙をあげたりふとんをほしたりしてゐます。

東京でもう残つたところはいくらもありません。僕が本をはこぶのも、やむを得ないでせう。　　では又。